

# 未来



全労協・郵政産業労働者  
ユニオン長崎中郵支部  
機関紙・「みらい」  
NO. 3960  
19年5月31日(金)  
Tel・Fax 095-828-1953

## 戦争と平和=2 戦争成金のいま

おはようございます。

先日、アメリカの資産家がある大学の卒業生全員の奨学金44億円の返済を、個人で肩代わるといふニュースを見た。いまだき珍しい富裕層の美談だ。

世の中では、急に金持ちになることを成金というが、将棋で歩が敵陣に入り、金になることが由来だが、日本では大正時代から、揶揄的に戦争成金として使われ始めた。

一九一四(大正三)年に始まった第一次世界大戦。この欧州の戦争に日本は「大正新時代の天佑」として参戦する。(大正天皇の開戦の詔書から)。天佑とは「天の助け」という意味だ。

このとき三井物産を退職した一隻の貨物船で船会社を起業した内田信也は、大戦景気に便乗して稼ぎ、結果的に船を一六隻に増やし、株価は六〇割の高配当で、資産家に成り上がり、船成金の典型とされる。

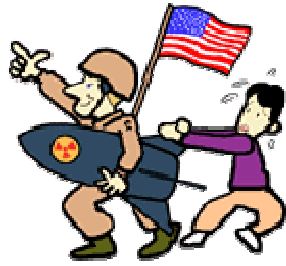


ときの風刺漫画に「成金の資本家が、座敷遊びで、暗い世の中を明るくするぞ!」といって、一円札(今の一万円札)を次々に燃やし、灯りを取った」というのがある。成金の象徴だ。

しかし、日本の参戦、派兵、常駐に、中華民国(中国)は日本軍の退去を求めるが、日

本は逆に領土割譲などの二二ヶ条の要求を中国につきつける。歴史的にはこれが日本の中国侵略の第一歩となり、のちの一五年間の対中国、対米英戦争のきっかけとなる。

そして第二次世界大戦だ。一九四一(昭和一六)年一月二六日。日米開戦(二月八日)前夜の最後の決断として、昭和天皇と内大臣の木戸幸一の会話が「木戸幸一日記」に残る。木戸幸一は明治維新の元勳、木戸孝允の孫で、天皇の信頼の厚い側近であり、木戸は開戦には慎重論を述べている。



有し、朕ここに米英に対して戦を宣す」と、ほぼ先の第一次世界大戦の大正天皇と同一文であり、「日本は情勢を『天の助け』と認識していた。

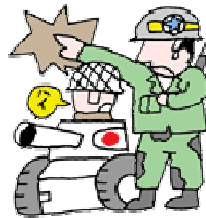
第一次大戦のドイツへの宣戦布告のときは、開戦まで八日間の猶予があつたが、今回は、攻撃が先であり、結果的に『だまし討ち』となる。なにをもつて「天の助け」と情勢を認識したのだろうか。背景としては、このときの日本は、対中国との戦争が泥沼となり、対米開戦の余力はなく、奇襲のみがわずかな望みであつたのだ。

戦後史では、この日本の奇襲や日米交渉の決裂が問題視されるが、史実は二月一日の「対米開戦の聖断」がある以上、日付の間違ひでは語れないだろう。

また日本側からよくいわれる、欧米のアジア植民地支配からの解放戦争だったという主張は、第一次世界大戦中に、すでに対中華二十一ヶ条要求と領土割譲がある以上、侵略の証拠は明白であり、アジア諸国には「解放戦争論」の理

解は得られない。

第一次世界大戦の最中の一九一六(大正五)年に書かれた河上肇(東大教授)の「貧乏物語」は、「驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である」と書き出す。当時も貧富の差は大きかった。



世界は国家主義の台頭で、米中関税戦争、新冷戦の時代に入った。おりしも訪日したトランプと安倍首相は、ゴルフだ、大相撲だと遊んだ末、日本の護衛艦「かが」に乗りこみ、閲兵した。これは戦後初のことである。「かが」は空母化され、日本海軍(海兵隊)の攻撃の拠点で、専守防衛の存在ではない。

河上は貧乏を根絶するには、①、世の富者が自ら進んで、一切の奢侈、ぜいたくを廃止すること。②、貧富の格差の是正。社会一般人の所得の格差をなくすこと。③、各種の生産事業(会社)を、私人の金儲け主義にまかせず、国が規制すること、と書いている。

昔も今も、起業して、時代の流れに乗り、成金になる人はいる。昔は戦争成金で、鉄や武器や輸送産業などであったが、いまはAIや株やネット起業などであるが、ZOZOの社長のように、いきなり百億円をばらまくなど、やることは派手で同じだ。

資産家へ成り上がりの原因の一つには、グローバル化した経済活動と、脱税タックスヘイブンも世界的に大流行

世界中の国々が、自国第一主義を掲げ、自国の利益のみを優先すれば、利害が対立し、戦争でしか解決できない政治・外交となる。経済戦争はその走りである。反戦・平和をたたかうことが、これを止める唯一の手段である。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員と希望者全員の正社員化を。

ゆめが、均等待遇、なげんご差別、ユニオンは労務法裁判に勝利したんやー

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1集-御手洗, 2集-向井, 3集-山田, ゆうちょ銀-上筋, 他支部・分会の役員へ。